

1 キツのナと ホムシさる アヤ

それ、31音のウタを特にワカと呼ぶ言葉には深い意味合いが込められています。単に若返るからワカだとも言えるのですが、その、下敷きには長い物語がベースにあります。

ワカの名前が付けられたのは、ワカヒメさんのお名前に由来していました。ワカヒメさんは、アマテルカミの実の姉なのですが、両親が「アメのフシ（後の厄年）」に当たったために捨て子にされたのです。

さて、ワカヒメは捨て子にされます。そして、カナサキのヲキナが拾い子として、ヒロタ及びニシトノに育てます。ヒロタは、現在の兵庫県西宮市大社町の広田神社に所縁を定められます。また、当時には大きな入江になっていて入江の入り口にニシトノも建てられました。此処は、中世には撰社の浜の南の宮とされています、現在の西宮神社（兵庫県西宮市社家町）です。

ヒロタに育てられるワカヒメさんは、カナサキの妻（エシナツ）の愛（いづく）しみを縦横に受ける事に成りました。エシナツさんは早世の子供に心を痛めていたので、ワカヒメに注ぐ愛情が大きかったからでした。アワウワとあやす愛情です。手を打ってシホの目（パチパチ、ぱー）です。

その養育は、伝統に沿っておこなわれました。ウマレヒ（誕生日）にはカシミケです。炊（か）いだミケ（穀物）の食べ初めをします。歩き初めのタチマヒもします。

3歳のフユ（冬）の至りの日（11月モチ。満月。大体15日）には、髪の毛の切り上げをおこないます、カミオキです。これよりは、年中行事にも参加をします。縄文哲学の基本の行事です。

ハツヒ（元旦）は、アワ（天地自然）へのウヤマヒ（感謝と敬愛）をおこないます。

3月3日は、モモにヒナの祭りです。ハル（春）の終わりの季節の到来を祝います。

5月5日は、アヤメにチマキの祭りです。さみたれ（梅雨）の、ナツ（夏）の盛りの到来を祝います。

7月7日は、タナハタの祭りです。アキ（秋）の到来を祝います。

9月9日は、キククリの祝いです。アキ（秋）の盛り到来です。

5歳のフユ（冬）の至りの11月モチ（大体15日）には、言葉の習い始めをします。（後の七五三）正装をしての行事です。ヲ（男の子）はハカマを着用します。メ（女の子）はカツキ（被り着）です。コトハ（言葉）を直す

アワウタを常に教えてゆきます。

◎◎◎◎◎ (あかはなま いきひにみうく)

△△△△△ (ふぬむえけ へねめおこほの)

母中央中母 (もとろそよ をてれせゑつる)

△△△△△ (すゆんちり しゐたらさやわ)

アワのウタを、音曲に合わせて歌います。カタ(打楽器)を掻き撃ち、コト(琴)を弾き奏でます。そうしますと、自ずからにコエ(声)も明らかになつてきます。キ・クラ、ム・ワタ、ヲ(人体の構成の基本、心と身体の元、五臓六腑とは成り立ちが違います)もネ・コエの構成から分けて明らかにあります。アのアワウタの24(フソヨ)に通つて、ワのアワウタも合わせて全体に48(ヨソヤ)に完全になります。この為、ミ(身体)の内部からの巡りが良くなり、ヤマヒ(病)も起きなくなります。それで、長寿の達成がなされます。

スミエのヲキナ(カナサキさん)は此の原理をちゃんとご存知でした。ワカヒメは、サトク(聡明)して、カナサキにキツサネ(東西南北)の名の謂えを問いました。カナサキのヲキナは答えて教えます。

『ヒ(日)の出ずるカシラ(始め)だから、ヒ・カシと言います。』

長け昇る方角は、ミ(身体)にナミを波々と齎すので、ミ・ナミです。

ヒ(日)の落ちゆく時は、ニ(真つ赤)に燃え尽き(シハ、為し終わる)て沈みますから、ニシです。

ヨネ(米)とミツ(水)をカマ(窯・竈)に炊ぐ際にも、方角の言葉の意味はあると言えます。

初めにヒ(火)を点けて熾(む)します。ヒ・カシラです。ヒ・カシです。

煮えてくると、ハナ(派手)に煮立って、ミ(ヨネの実)にナミ(為しむる・生じさせる)が入ってきます。

ニ(柔らかくなる)を得て、シ(為す)がツム(集まる。積む)ので、食べやすくなります。

アマテルカミはご長寿を実現するために、少食を実践なさって居られます。エカ【詳細は未詳】に一度のミケはこれです。昔からの食物を寿命の関連の

ことを考えてみます。大昔には月に二度のミケでした。それが、月に三度ミケを食するようになる頃までのヒトの寿命はモヨロ（100万年）でした。月に六度ミケを食する時代になったらヒトの寿命はフソヨロ（20万年）でした。さらに時代が降つて、今の世になりましたらたつたのフヨロ（2万年）年だけ生き長らえるだけです。この歴史を考えますと、ミケが重なるほどにヨワイ（寿命）は短くなるようです。此の故に、ヨンカミ（アマテルカミ）は月に一度のミケに止めて居られます。また、苦いハホナ（チヨミクサ）を常食もされておいでです。

ミヤの建築について考えてみましょう。ミ・ナミ（南）に向きて建てられるのは、最も良いナミの享受を得るためです。ア・サキ（天空からの及ぼされるキ（エネルギー））を充分に得て長生きを実現できます。ミヤの後ろをキタと言う言葉の意味は、夜には寝るからキタはネと言います。例えて言えば、若しもヒト（他人）が訪ねて来たとしましよう。そして来意を告げましても、それが、どうであるかですね。会うべき意義のない場合は、会うべきではありません。その場合は、キタ（来た）だけの事です。しかし、会うことになったら、日の出と同じになります。ヒ・カシラのヒ・カシです。会って話を進めますと、ミにナミを受けて事が^{わかま}弁えゆきます。話が落ち着くのはニシです。赤く煮え定まるニ・シです。そして、キタに帰ってゆきます。ネより来たりて、ネに帰ります。此処にも、方角の順番の意味が備わっています。またさらに、天地自然の季節の移り変わりにも、方角の意義は備わっています。木はハル（春）には若葉で彩られます。ナツ（夏）は青葉です。アキ（秋）はニエ（赤く燃えた）モミチ（紅葉）です。フユ（冬）は落ち葉になります。此処にも同じ意味が含まれています。ネ（根つ子、根底）はキタに充実が図られます。キ・サス（兆し）のヒ・カシの若葉です。サのサカエ（栄え）の青葉です。ツのニ・シ（赤く為す）ツクル（尽きる）の紅葉になる循環です。

そして、（ヲ・中央）とは、キミ（キとミ、東と西、ヲカミとメカミ）がクニをヲサム（教え導く）事から、キツヲサネの中央に位置しているので、つまり、キツサネ（東西南北）と、（ヲ・中央）は、ヨモ（四方）とナカ（中央）の関係とも言えます。キ（ヲカミ）はヒ・カシ（ヒ・カシラ、兆し）です。ハナ（花）もハ（葉）もミ・ナミ（身体にナミ）です。木の実は

ニ・シ(煮^にえて為^し尽くす)です。ミ(実)を別けてオフル(生じる)キ(ヲカミ)のミ(メカミ)でありますので、キミはヲ・メカミと言う訳です。カミとは、**カミ**(カミ)でして、『繋がり齎し・生じさせるの意味です』

さてさて、ウタの事につきまして、ワカと名付けられた謂^いわれを説明しましょう。

今の御代の、ことです。(8代アマカミのアマテルカミの時代)イサワのミヤにワカヒメが侍^{はべ}っていた時に、キシキ(和歌山)のイナダ(稲田)がホラムシ(イナゴ)に害された事がありました。キシキの人は窮状をイサワのヲシカミ(アマテルカミ)に訴えに来ました。折しもその時はアマテルカミはアマのマナキにミユキ(御幸)にお出かけなされた後でご不在でした。イサワに遷都の後にも、マナキにミユキをなさってトヨケカミをお慕いなさって居られたのですね。

アマテルカミのご不在を強く嘆くキシキの人々でした。そこで、正皇后のムカツヒメは代理としてキシキに急ぎ赴^{おもむ}かれ行啓されました。ワカヒメも同行します。キシキ(和歌山)の田のキ(東)に立たれてオシクサ(ホ9-42、31-53、32-39には[✳]に作る。教えの元)に扇ぐワカヒメでした。つまりワカヒメはウタをお詠みになりました。ウタを以って扇ぎ払うと、ムシは去って行きますのでした。そこで、ムカツヒメはこのウタを以って大々的に虫払いをしようと、企画なさいました。30人の女性を左右^{たなず}に佇^たませてそれぞれ各々も共に歌わしめます。イナムシ(稲虫)を払うワカのマシナイ(生じさせる・為す・成る・心を尽くす)です。

タネはたね ウムスキサカメ
マメスメラノソロハモハメソ
ムシモミナシム

「た(田、エネルギーの根底、治世の源)」の根底(ネ)をハタル(強引に貪る)事はしないで下さい。生むス(為す)、「キ(東)」は榮える「メ(目・要・芽)」です。「マ」の「メ(目・要)」を、ス(為す)「メラノ(なさしめられる)」、ソロ(水田の作物、畑の作物)のハ(葉)もハメソ(食べるな)。「ムシ(害虫)よ、あなたもミ(稲の実、いねもみ)を成さしめる為に心を使

いなさいよ」

繰り返し360回朗唱しましたら、ムシはサラリとニシ(西)のウミ(海)に飛び去っていきました。エ(災い)は此処に払うことが出来ました。ワカヒメの試みの通りに、イネは若やぎを取り戻しました。蘇ったイネです。又ハタマの真つ暗の希望のない時から、一転して明るく、**母** **夷**(ソロ)に実つて世の糧を得たのでした。尊き恵みです、タカラです。オンタカラのキシキの国民は、喜んで感謝を表すためにアヒミヤの前に追加して、アヒのマエミヤを建てました。ムカツヒメへの感謝の現れです。さらに、西の景勝地の海辺にタマツミヤを建てました、ワカヒメへの感謝を表すためです。ワカヒメは、気に入ってタマツミヤに逗留するようになります。(現在の、玉津島神社、和歌山市和歌浦中)とても素晴らしい景勝の地です。また、アヒミヤをクニカケのミヤとして呼ぶようになります。(日前国懸神宮、和歌山市秋月)それは、ワカヒメの枯れそうになったイネを若返らせた、ウタの功績から特に尊んだことでした。本来の人々を守るべきの元々のアヒミヤはあんまり役に立たなかったからでした。それで、クニカケです。クニカケのミヤ(元のアヒミヤ)の前にアヒのマエミヤが建てられて、ムカツヒメへの感謝が表された訳けです。

さて、タマツのミヤにワカヒメが逗留していますうちに、兄のアマテルカミから使者が使わされて来ました。使者のアチヒコと言う人物は、コヨミを新たに作成し直したり天文学や数学にも明るい立派なヒトでした。さらに、イサワのミヤの造営を成し遂げたりと、本当に仕事の出来る人でした。余りにも忙しかったアチヒコさん、また、ワカヒメも結構な多忙の内に暮らしていました。その二人が、タマツミヤで安寧の一時を得ましたのでした。ワカヒメはウタを讀んでかねてからの思いを伝えました。

ムカツヒメ

タマツミヤ

ワカヒメ

(きしいこそ つまおみきわに

ことこのねの とこにわきみお

まつそこゐしき)

「キシイこそ ツマ(妻)お(を) みきわ(身際)に コト(琴)のネ(音)

の トコ(所)にワキミお(を) まつそ(待つぞ) こいしき(こゐ、恋しき)「アチヒコは返歌をすぐに返し得ませんできて、ミヤコのイサワ(志摩市伊雑)の宮中に戻ります。どう返答していいものか? アチヒコは、イサワに滞在する人々に聞いてみるのです。カナサキさんは言います。

『このウタは、拒否する事の出来ない、マワリウタです。それは返答の出来ない、自己完結の完璧なウタなのです。

むかし、わたくしも、キミ(アマテルカミのミユキか?)のお供で、船に乗っていた時のことでした。風が激しくて大波が立っていました。この分では、港に無事に着くことが出来るかどうか? 危ういところです。そこで、ウタを詠みました。マワリウタです。

㊦㊦㊦㊦ ㊦㊦㊦㊦ ㊦㊦㊦㊦

㊦㊦㊦㊦ ㊦㊦㊦㊦ ㊦㊦㊦㊦

㊦㊦㊦㊦ ㊦㊦㊦㊦

(なかきよの とおのねふりの
みなめさめ なみのりふねの
おとのよきかな)

(ひとつ気になりますのが「なかきよの」の「なか」の意味が「長い」を指すならば、「なが」になるようで、それなら末尾の「かな」も「がな」で良さそうですが、どちらの「か」も清音で記されています。「なかきよの」の清音で意味を考えますと、「なかきよ」の「とお」を、中々に良き世の来ることを「ト」のロシテの理念の普及で「ネ(根底)」からの「フリ(振興)」を図れます、皆(国民すべて)が目覚める事です、波乗りフネ(船)の音も良き事ですね。)

「なかきよの」のマワリウタを詠みまして歌いますと、程もなく、風は止み、フネは快く進むことが出来、無事にアワ(四国の阿波か?)に着きました。

マワリウタには、強い力が備わっているのだと思います。

ワカヒメのウタも、ワマワリウタで、打ち返す事は難しいではありませんか? ワカヒメのミヤヒの心を返すこともないではありませんか? 『ワカヒメさんの育ての親でもあるカナサキさんの勧めでした。さらに、アマテルカミも、薦めておっしゃいます。

『カナサキが、フネノリを受けて、メヲ(夫婦)となるのがよろしいでしょう』

そうして、アチヒコとワカヒメは結ばれまして、ワカヒメはヤスカワのシ

タテルヒメの称号を得ました。

ラブレターのウタで結ばれたアチヒコには、オモイカネのニツクネームが付きました。思い兼ねてのアチヒコさんでして、皆がみんなオモイカネと呼ぶのでした。ヤスカワの辺りにオモイカネとシタテルヒメのミヤを設けます。今の滋賀県野洲市には比留田の地名もあり、比留田神社も『延喜式』に記載されています。

シタテルヒメのオシクサ（ホ9-42、31-53、32-39には[☆]に作る。教えの元）の事を詳しく説明します。

ヌハタマのミ（実）を成らせるヒアフギ（カラスアフギ、アヤメの一種）に例えたりしています。真つ黒のヌハタマの実は、夜の例えです。それが、盛夏のミナツキ（旧暦6月）には真つ赤な花が咲きます。ホノホ（炎）のようなハナです。カラスのような真つ黒な実をハ（生じさせる）のは、赤き明るい日の出のハナでした。ヒ・アフギ（ヒオウギのアヤメ）の平らな形を扇に象^{かたど}つて、国家経営の基礎を教える[☆]カキ[△]（ロシエクサ）を作りました。12体のそれぞれに、32扇を取り付けて、下部にはヒアフギのアヤメを4株付けます。カラス・アフギの12体です。32は、365日の12分の1の30・4日を切り上げて31日として、さらに魔物の入り込む隙を埋めるために、余分の1日を足した32の数字です。ヒアフギの4株は、12体の全部を足しますと48の言葉の音韻の数に相当します。48は天地自然の根拠を表しています。

イサナミさんの亡き後、ハナキネ（後のソサノヲ）は、ワカヒメさんの許で教育を受けていました。

そこで、若いハナキネは5・7音の綴り方の謂われを質問しました。

ワカヒメの答えは次のようでした。

『5・7音に綴る^つのは、アワのフシだからです。つまり寒い時期の5ヶ月のネの季節と、温かな7ヶ月の満ち満ちた季節を表現しているのが、天地自然の恵みの内に暮らすヒトとしての基本の備わりだからです』

また、さらに若いハナキネは、ハラヒ（魔物の払い）の32の意味を質問します。姉で母親代わりのワカヒメさんは教えて答えます。

『ハラヒはミソフ（32）なのです。何故ならば、31に一日を足したもののなのです。31日は、一年の365日を12ヶ月で割った30・4を、切

り上げて纏めた数字です。しかし、ツキ（月）の巡りは30日にも足りません。ツキは重くて巡りが遅くなるためです。ヒ（日）の巡りからしましたら、31日をひと月と考えるのが妥当なところでは。31日に後先半日ずつヒ（日）を足して32日にしたら、隙間なくピシッと嵌り込んで魔物が入る隙が無くなります。アルマ（隙間が有る）を伺うのがヲエモノです、魔物ですね。このヲエモノを払う力のあるのが声（音韻）の一音余つての32音のウタなのです。

ヒトとはシキシマ（為す来る締り）の会う所に生まれてくるものです。微妙な偶然の合わさりの所とも言えますでしょうか。天地自然の巡りのヒ（日）とツキ（月）の循環の31日がそもそもにもカス（来る為す）リズムです。ですので、メは間は32に来ます。それで32の字余らせウタはヲエモノ（魔物）払いの効力があるのです。ウタのカス（来る為す）の力はワ（地球上のあらゆる物）に^{こた}応えるものなのです。此の故にシキシマ（為す来る締り）に

因って為す（田）（の）（）ワカのミチなのです』

2、 アメナナヨ トコミキの アヤ

アメツチ（天地）の始まりの解き明かしを、アマテルカミが説明なさったこの時は、ミコ（皇子）のオシホミミ（オシヒト）さんにタクハタ・チチヒメさんがトツギ入られる儀式の直前のことでした。

チチヒメさんの父のタカギさん（7代タカミムスヒ）は、婚儀の際にミキ（サケ、お酒）が重要な役割を果たしていることに、その謂われを質問しました。

『トツギのミキには、特別な意味合いがあると聞いています。婚儀に際しまして大切なアヤをお教え下さいませんか？』

アマテルカミは、入り嫁の父のタカギさんに、「アメナナヨ（7代までの歴史）」と「トコミキ（トツギを固める時のミキ）」のアヤを説明なさいました。

はじめの時の昔いにしへのことです。アメ・ツチの初期のウヒ（ドロドロ状態）の兆しの未だに無い時のことでした。

最初にアメミヲヤのイキが吹き放たれて兆しが起きました。分離して別れ初めたのはアウのメ（重い物）とヲ（軽いもの）です。アウと言うのは、アワ（原初の気体）とウヒ（原初の液体や固体）の事として、集まりグルグル回転する内に重い軽いの差に因って分離がなされます。ヲ（軽いもの）はアメ（天空）となりヒのワ（日）になります。メ（重いもの）はクニ（クニタマ、地球）となりツキ（月）となります。

カミ（カンヒト、祖先の人類）はその内に生まれました。やがて、人類は繁茂を遂げてゆき、アマカミの初代のクニトコタチの出現がおきました。クニトコタチはトコヨクニとして建国をします。「トのヲシテ」を国家の理念とする事から「トコヨクニ」と命名されました。

さらに、国家は発展してゆき遠方の地域からも指導を求められます。そこで、8地域に次代を担う指導者が派遣されました。ヤモ・ヤクタリミコと言います。それぞれ、ト・ホ・カ・ミ・エ・ヒ・タ・メのカミ（指導者）はそのクニ（地域）を治めました。ここに、クニキミの始まりが起きました。サキリのミチ（夏の豊かなエネルギー）を、重んじてサツチ（夏の繁栄を尊ぶ）に治めたのでした。2代目のクニサツチの時代でした。それぞれに、中タリ【5人か？ 詳細は未詳】のミコを生むのでした。

次代は、3代目のトヨクンヌの時にあります。ヤモ（8地域）のトヨクンヌは、キミの補佐にトミを設けます。キミとトミとタミの三階層の役割分担

の時代になります。トヨクンヌには120のミコがあった【詳細は未詳】と言われています。

アメナルミチの建国からの3代の間には、女性がマツリコト（政治）に関わること無く治まっています。この、3代の間は長い長い時代でした。おそらくは、世襲制の複数の世代に拠るアマカミであったと推定されます。

マサカキ（一本60000年と公称するコヨミの樹）を植え継いで500本にも及んだ頃、ミモ・ハカリ（3000万年）となります。モ・ハカリが1000万年（マサカキ・コヨミでの計数年）で、とても長い年月という意味で記されているようです。モ・ハカリやミモ・ハカリは、大まかな長年として理解すると適切なようです。

4代目のアマカミは、^{（男性）}ヲカミのウヒチニでした。この時代に社会の構造に变革がもたらされます。時代の要請として、女性の社会的な役割が求められてきます。ウヒチニは、ウヒチニを正室に定めます。ここに、婚姻の制度が起きました。サヒアヒ（サイアヒ）とも呼ばれる婚姻制度は、広くタミにも広まってゆきます。

サヒアヒ（サイアヒ）【詳細は未詳】の婚姻の制度のその元オリは、ウヒチニのヒナルノタケ（福井県越前市中平吹町、日野神社、日野山）のカンミヤにモモ（日本固有種のモモ）のキのミ（木の実）をお持ちになって^{みくらい}即位に即かれました。モモ（日本固有種のモモ）のミ（木の実）は、ヒナルのタケのカンミヤ（福井県越前市中平吹町、日野神社、日野山）の庭に植えられました。所、3年の後にハナ（花）もミ（実）もモモ（百ほどにも多く）に咲き、実も成りゆくようです。それで、モモ（生じて固まる）のハナと名付けられました。ウヒチニとスヒチニのフタカミの事を、モモヒナギとモモヒナミとお呼びすることになったのは、モモの花と実に由来します。「ヒナ」の言葉が付

きました意味は、ヒトに成る^なマエ（以前）で、男女のペアになって初めて一人前と言う意味です。ハナもミ（実）もソ（揃う所）の木の実の由来によって、ヲカミは「キ」、メカミは「ミ」と名が付きました。揃ってペアになったヒトとして表明する婚姻の儀式は、ヤヨヒ（旧3月）ミカ（3日）に、ミキ（お酒）を醸し作って奉るのでした。モモのハナ（花）の許に、白酒のミキを酌みますと、細い三日月ほどのツキ（月）が器に映りました。細いお月さまを浮かべてミキ（お酒）を勧めます。^{すす}メカミが先ずお飲みになりました、後にヲカミです。「ミ・キ（実を結ぶ・女性、春の兆し・男性）」のお酒の名

称の通りです。ミ・キを飲みて男女が交わります。トコのミキです。「トのヲシテ」の精神で絆を固める「ミ・キ(実を結ぶ・女性、春の兆し・男性)」のお酒です。「ミ(生じてくる)」の夫婦としての意識が篤く備わって、正月の3日アサ(朝)には、サムカワ【詳細は未詳】で浴びられます。河でのミソギです。ソテ(袖)の濡れ方に大小の違いがありました。ヲカミは大きくヒチテ(濡れて)、メカミは少ないヒチ(濡れ)でした。それは、ヲカミがメカミを庇かばって水浴びをしたからでした。「ニ(にこやかな、優しい)」のお心です。「ウ(大きい)」と「ス(少ない)」の「ニ(にこやか)」のこころの、仕草に現れた尊いことだと、ウヒチニさん、スヒチニさんと呼ぶようになります。ウヒとは、また、クニタマ(地球)の形作られる以前の「ウヒ(原初のドロドロ状態)」も意識した命名です。「ウヒ」が煮上がった、固体・液体と、気体の分離が進み「クニタマ(地球)」に形成されました。

大きい少ないの、「ウ・ス」のフルコト(故事)から、ヒナのヒナカタ(雛形)が作られます。ヲ(男性)はウオソテ(大袖)とハカマ(袴)の姿です。メ(女性)はコソテ(小袖)と上に被るカツキ(被衣)です。ヒナカタの形が示されたので、広く国民にも結婚の制度が広まります。先ずは、ヤソ(80)のトミ(臣)たちが婚姻をおこないまして、タミ(一般国民)もツマを定めました。ウヒの、クニタマ(地球)の形作られる以前の「ウヒ(原初のドロドロ状態)」が煮上がった、固体・液体と、気体の分離が進み「クニタマ(地球)」に形成され、そこから人類の発生が起きたわけです。アメ(天体)の形成からの歴史を踏まえたミチの結婚の制度は「アメナルミチ」とも言えるわけです。これよりタクイ(家族、血族)も生じてきます。この時から500本のアマのマサカキ(500×6万年≒3000万年)の植え継がれました。(マサカキのコヨミに依る計数年で長い年月の経過と理解されます)次の時代は5代目オオトノチ、オオトマエに移ります。ツノク中とイククイのアマカミ(古代の天皇陛下)でして、ツノク中^{オオトノ}はオオトノ(大きな宮殿)に於いて、イククイをツマに迎えます。「ト」前に会ってツマと為したことから、「~~オ~~(ヲ・男性)はトノの別名が付きます。「ネ(メ、女性)」はマエの別名で呼ばれます。ヤモツツキ【詳細は未詳、八方の地方にも波及か? 800本のマサカキの植え継ぎの意か?】

6代目アマカミは、オモタルのカミです。カシコネさんとヤモ(八方)を巡ってタミ(一般国民)をタシ(「トのヲシテ」の精神で恵み治める)ます。タサ、タシ、タス、タセと言う意味は、良い知恵を以ってプラスしてより良い方向に相乗効果を上げてゆくやり方です。オモタルさん、カシコネさんは、

ヲウミ・アツミ（琵琶湖西岸の安曇川平野）の中心地のナカハシラから、全国各地を巡ります。ヒカシ（東）はヤマト（東海道諸国）やヒタカミ（東北地方）、ニシ（西）はツキシミ（九州）やアシハラ（中国地方）、ミナミ（南）はアワ（四国地方）やソサ（紀伊半島地方）、キタ（北）はネ（北陸道地方）やホソホコ・チタルクニ（山陰道地方・出雲方面）までも巡り教え導きをなされました。モヨホ（100万年、マサカキのコヨミでの計年数）の長い年月を経ても、お世継ぎに恵まれませんでしたが。気候の変化もあって、治世のミチは衰えて世の中に混乱が生じてきました。ワイタメ【詳細は未詳、秩序の混乱を意味する】の状態に陥おちいったのでした。国家の再建を託すべき次代のアマカミには、イサナギとイサナミが選ばれます。イサナギはネのクニの名君のアワナギさんの継ぎ子でした。イサナミはヒタカミの名君のトヨケカミの娘さんです。イサナギ、イサナミのカップルをフタカミとして7代アマカミの重責を担ってもらうことに成りました。

皇位を譲られる際に、6代目アマカミのおモタルさんは、フタカミにミコトノリなさいます。

『これからのツホ（壺、要所）はアシハラ（低湿地の芦の原）の開発に懸かかっていると考えられます。直接に治めている従来の1500の村落をあなた方に委ねます。また、統治の精神と印しとして、「トのヲシテ」と「ホコ（サカホコ、後のツルギ）」も授けます』

ミコトノリを受けて、フタカミはウキハシ（皇位を受け継ぐ橋渡し）を得て7代目アマカミの位に即位なさいました。ホコの治安維持の影響力を以って、社会に安定が齎されオノコロ（自ずからに定まり安定する）の状態が得られるのでした。その、道のりは、ミヤトノ（中心の宮殿）を建てて国家の再建を果たし、国号をオオヤマトと称することに始まります。各地域のクニを定め直しをおこないます。さらに、言葉のミチを定め直し、耕作技術の革新を図るなど、ヨロモノを生み出したのでした。ヒトクサ（一般国民）のミケ（食料）もコ・カヒ（養蚕技術、服飾の技術）のミチも教え広めて、人々はオノコロ（自ずからに定まり安定する）を得る事が出来たのでした。ここに、ワイタメ【詳細は未詳、秩序の混乱を意味する】の状態からの抜け出しの功績のイサオシと言われます。

さて、アメノカミのヨ（世）の7代目を、皇統からは遠かったフタカミが継ぐ事になった経緯を振り返ってみます。糸口はトコヨカミ（初代クニトコタチ）がマサカキの木の実をヒカシ（東）の土地に植えてハコクニのカミを任命なさった事に始まります。ハコクニは、地震・津波で荒廃した国土を立て直す意味の「ハ・コ（地面・クニ、通るように固める）」、復興のクニの言

葉が近いわけです。ヒタカミのタカマ（中心のミヤ）にもミナカヌシ（人類の祖先）を祭りました。タチハナ（カク、日本固有種のミカン）を植えて、ヒタカミのキミはタカミムスヒとして讃えられて代々受け継がれてゆきます。キのトコタチとも讃えられます。キとは東の意味でもあり、マサカキ（コヨミの樹）も、タチハナ（カク、日本固有種のミカンも特別に別けて植えた尊いクニの意味です）。

その、ミコにアメカカミカミが出ます。カカミカミは、ツクシ（九州）をタシ（教え治める）しました。カカミカミは偉くて、4代目アマカミのウヒチニさんも教えを受けたほどです。具体的にはマサカキの樹を別けて貰ったと推察されます。

カカミカミのミコにアメヨロツカミが出ます。ヨロツカミはソアサ（四国）をタシ（教え治める）しました。ヨロツカミは、アワナギとサクナギのミコを儲けます。アワナギはネのシラヤマを中心に、チタル（出雲地方）までノリ（法、掟）も通って治めたのでした。そこで産まれたのがタカヒト（のちのイサナギ）でした。タカヒトは立派なヒトなりにカミロギと尊称されます。イサナミさんの出自は、タカミムスビの家からでした。5代目のカミのタマキネ（トヨケカミ・トヨウケ）さんの娘さんのイサコヒメが後にイサナミさんと呼ばれます。

タカヒト（イサナギ）さんと、イサコヒメ（イサナミ）さんの婚儀は、ウキハシ（仲人）をハヤタマノヲ（速玉大社、和歌山県新宮市新宮、に由来ありか？）が務めました。しかし、新婚のご両人が打ち解けるまで、上手くゆきませんでした。そこをコトサカノヲが解とき結びました。ヒタカミのツサ（西南）のツクハ（筑波山）のイサミヤにてミヤを持たれて、イサナギさんとイサナミさんと名乗られました。

このフタカミの交わる時もトコミキのお酒が用いられました。トコミキの「トコ」とは、「トのヲシテ」の「ト」と、「ホコ」の「コ」で「オノコロ」の「コ」にも掛かって意味しています。国家の安定を実現する為にもコ（子）を求むるわけです。

そもそもササケ（お酒）の名前の由来は、トコヨ（琵琶湖湖岸地方）の中ノクチ【多くの候補地があり、詳細は未詳】のスクナミカミ（後のスヒチニさん）の所にあつた竹株にススメ（雀）がモミ（粃）を入れているのを見て、お酒に醗酵するのを発見したのでした。タケ（竹）の別名のササから、ササケと命名されました。ミキを醸して奉ったので、モモヒナギ（4代アマカミ）さんからササナミと言う名前を賜ったのです。ササナミさんはササケヤマ（沙貴神社、滋賀県近江八幡市安土町常楽寺、佐々木山、あるいは日置神社、滋賀県高島市今津町酒波などに由来有りか？）に当時居たのでした。

コノクミ（固めの杯）の謂われは、ヤヨイ・ミカ（3月3日）に結婚の儀式を初めて執りおこなった故事に因^{ちな}んでいました。サカツキ（酒に細い月、杯）の名称を生んだ4代目のアマカミの名のモモヒナギを尊んで、その山をヒナガタケ（日野山、日永嶽、福井県越前市と南条郡南越前町）と讃えるのです。

3 ヒ・ヒメ、ミ・ヲ うむトノのアヤ

(一女、三男 を産むトノ(館)のアヤ)

モロカミ(諸臣)がタカマ(宮中)にマツリコト(政治)に集まって諮^{はか}つての後のことでした。

諸臣の集まるタカマ(宮中)の場所は勉強の場でもありまして、この時は、ツワモノヌシが歴史についての質問をしました。

『フタカミ(イサナギ、イサナミ)のヒ・ヒメとミ・ヲ(一女、三男)を

儲けになられたトノ(建物)の場所が五カ所だと聞きました。お四方^{よんかた}なのにどうして五カ所の産屋になるのでしょうか?』

此の問には、カナサキさんが答えました。

昔の事です。フタカミは最初ツクハ(筑波山の近く)において新婚生活を始められました。柱の周りを巡られて問われました。

「メカミには成りなり足らぬメモトあり」

「ワカミの成りて余るモノ、合わせてミコを産まん」

として、ミトのマクハイを為してコ(子)を孕^{はら}みて産めるのは女の子でした。名はヒルコと名付けられました。(後のワカヒメ、シタテルヒメさんです)

ところが、チチ(父)のイサナギさんは40歳で、ハハ(母)のイサナミさんは33歳でした。共にアメのフシ(後の厄年に匹敵)に当たっていました。アメのフシだと孕み子は、チチのヲエ(身体の病)にあるいはハハのクマ(心の病)に当たるとされています。そこで、伝統の通りに捨て子にして、

他の人に育ててもらうことになりました。3歳に満たない幼^{いたいけ}気な時に、イワ

クスフネ(祝い飾った舟)に乗せて捨て子にしました。カナサキのヲキナが拾い子としてヒロタの場所(広田神社、兵庫県西宮市大社町)とニシノミヤ(西宮神社、兵庫県西宮市社家町、中世は浜の南の社と呼ばれる)にヒルコヒメを育てます。

父母のフタハシラ(イサナギ、イサナミ)は、皇位を受け継ぐウキハシ(大いなる役目の仲たちの人)を得る事になります。オノコロ(自然な収まり所)の成り行きでした。当時は、6代アマカミのオモタルさんとカシコネさんの間にお世継ぎが生まれませんでした。さらに、気候変化で農作物の不作が続き世の中の秩序に混乱が生じて「ワイイタメアラズ(分別・区別なし)」の事態になっていました。オモタルさんはオノ(木を切る道具)で罪人を斬って世

の秩序の維持に努められましたが、良い世の中に向けるまでには至りませんでした。そこで、イサナギとイサナミに7代目の皇位が譲られることに成りました。

皇位継承の儀式はヤヒロトノ（間口8間の大きな建物）にておこなわれます。イサナギさん、イサナミさんのフタハシラは世の中に秩序を齎してオノコロ（自ずからに安定する）を為しゆくために即位継承の儀式を挙行なさいました。ミヤのナカハシラを大宇宙の中心に見立てて巡りてコトアケ（宣言）をしようと思われれます。北側に立って、メ（イサナミさん）はヒタリ（左）から、ヲ（イサナギさん）はミキ（右）に別れて巡って回られます。お二人が会われました南側にてコトアケ（宣言、言挙げ）をなさいました。イサナミさんはおっしゃいます。

「アナニエヤ エヲトコ」と。

またイサナギさんも受けて応えられます。

「ワナウレシ エオトメ」と。

フタカミは歌いあいました。後にイサナミさんは孕まれますが、エナ（胞衣）は破れて月満ちるまでに至らず流産になってしまいました。このヒヨルコはアハ（泡）となって、コ（子）の数には数えられません。アシフネに乗せてアハチ（淡路島）にて流すのでした。アメ（先代の6代目オモタルさん）に報告しました所、オモタルさんは「フトマニ」にウラナイをして下さいました。そして、因果関係を教えられます。

『中・ヨ（5・4）のウタの音韻数の不適切さによって、コト（結果）が結ばれなかったのでしょう。』

また、コトアケ（宣誓・宣言）も女性から始めたのは、これも、良くなかったようです。

トリのトツキ（嫁ぎ）の例を見てみましょう。庭先で尾羽根をパタパタさせているニハナフリ（鶴鴿）がいます。メのニハナフリが、パタパタさせて誘って鳴いても、この時はヲは鳴き去ります。またある日に、ヲトリが装い誘います。これをメが知って、あひ（会い）交わります。ニハナフリのトツキ（嫁ぎ）のやり方こそは、アメ（天然自然）からの告げの教えです』

そこで、フタカミはもう一度、ヤヒロトノ（間口8間の大きな建物）に戻ってナカハシラを巡り直します。今度は季節の巡りに合わせた方角に、それぞれに巡られます。北に立たれたフタカミは、ヲのイサナギさんがヒタリ（左）のヒカシ（東）の方向へ、メのイサナミさんはミキ（右）のニシ（西）の方向へ、巡り会うミナミ（南）の所で歌います。アメのアワウタです。

イサナギさんは、

『アナニエヤ ウマシオトメニ

アイヌトキ』

イサナミさんが答えて、

『ワナニヤシ ウマシヲトコニ
アヒキトソ』

そうして、全国各地を巡行なさいませ。国家の建て直しです。ヤマト(東海道諸国)のアキツス(明らかに治まり)。アハチシマ(淡路島)にも至りませ。イヨとアハのフタナのクニ(四国)。オキ(隠岐)のミツコ(三つ子)の島にも及びませ。サト(佐渡)にもウシマ(大島)にも、立て直しは及びませ。豊かになつてゆく海川や山の幸でした。キヲヤククノチ カヤノヒメノツチモナリテ【地力を増して農業生産に資する技術のことか? 詳細は未詳】。アワウタ(48音の5・7調4行のウタ)を教えて国語力を高めて全国を巡られたフタカミは、富士山南麓のハラミのミヤにて治めておられました。さて、トのクニサツチの由緒の深いハラミにて居られますと、国家の再建への道のりはほぼ軌道に乗ったことを実感なさいませ。さて、次のテーマはお世継ぎのミコの誕生が待たれることです。イサナギさんはおっしゃいます。

『既にヤシマ(全国)の再建は成つてきたのです。イカンソ(如何にか!)キミ(お世継ぎのミコ)をウマン(儲けよう)』と強く念願なさいませ。ハラミヤマ(富士山)に登られたイサナギさんは、マスカガミ(周囲がヒトの平均身長)の大きなカガミ(鏡)に照らして誓いを立てられました。富士山の山頂のコノシロイケの水でタ(左)の目を洗ってヒル(日)に祈り、カ(右)の目を洗ってツキ(月)に祈りました。そうして産まれたミコはヒのミコ、ヒのカミと名付けられます。ミナ(当面のお名前)をウホヒルギと讃えてお呼びするのでした。イサナギさんの姉(妹かも?)のココリヒメ(キクキリヒメ)が、ミコの声から聞き取ったというミナ(御名)でした。全国の津々浦々にまでも、ヒのミコに寄せる期待は高まりました。そこで、勉強のためヒタカミのトヨケカミの許へ留学をなさいませ。アメのギ(天下を治めるべき皇太子)としての教育です。ミハシラノミチを奉ります。ヒのミコ(後のアマテルカミ)のご誕生祈願のハラミ(富士山)を、オオヒヤマと呼ぶようになりました。トヨケカミはヒのミコのイミナ(マコトナ、実名)をワカヒトと命名なさいませ。

フタカミは次いでツクシ(九州)に赴かれます。ツクシにて産まれたミコをツキヨミのカミと名付けられます。ハラミ(富士山)の山頂でのミソギ(禊ぎ)の事が所以ゆえんになつてませ。富士山の山頂のコノシロイケの水でタ(左)

の目を洗ってヒル(日)に祈り、カ(右)の目を洗ってツキ(月)に祈られた事でした。東のハラミ(富士山)にてはウホヒルギ(後のアマテルカミ)さんのご誕生があり、ニシ(西)のツクスミ(九州)にてはツキヨミさんです。ちなみに、現在地の考証としましては、ハラミは南麓の浅間大社(元の

おミヤの位置はもつと山のほうだとも言われています。富士宮市)、ツキシミは江田神社(宮崎市阿波岐原町産母)が候補地として有力です。共に『延喜式』に記載がされていますので千年の歴史は確認できます。ツキシミさんもヒのミコ(後のアマテルカミ)に続けと、ヒタカミのトヨケカミの許に勉強に赴かせました。

さて、先年にアメのフシ(今の厄年)に当たったのでヲエ・クマ(身体(病・心の病)除けのために捨て子にしたヒルコヒメが成長してきました。ヒルコヒメは元のイサナギさんイサナミさんの許に戻ってきます。そこで、アマテルカミの妹として兄妹に復しました。ソサ(和歌山から熊野地方にかけて)に至って、フタカミはミコを儲けます。ソサノヲ(後の別名にスサノヲ)の生まれながらに、母のイサナミさんにケカレ【ケ(ちから)の枯れ、穢れ、ヲノコはハハのクマとなる、詳細は未詳】があつたため素直な子には育ちませんでした。ソサノヲは、常にオタケヒ(騒ぎ立てて)ナキ・イサチ(泣き喚いて)クニタミ(一般国民)に迷惑ばかりかけます。このソサノヲの齎す災いは、イサナミさんのご自身の身から出た鏝で、我が身に受けて償おうとなさいました。また、タミの人々のヲエ・クマも我が身に受けて守ろうと、クマノ・ミヤをお建てになりました。現在では熊野本宮大社(熊野坐神社、和歌山県田辺市本宮町本宮)と記載されていますが、クマノの言葉の本意はヲエ・クマ(身体(病・心の病)からきていました。イサナミさんがタミのヲエ・クマ(身体(病・心の病)をも守ろうと念願なさつての命名)です。

こうして、みこころを、お尽くしになられてヒ・ヒメとミ・ヲ(一女三男)をそのカミ(昔)に儲けになりました。キミ・トミのミチを定めて、「トのヲシテ」をはつきりと再び通してゆかれました。また、時代の要請により「トのヲシテ」を乱して逆らう者をホコ(後のツルギ)によって滅ぼす制度も導入なさいました。社会の秩序維持を目的とした制度です。

イサナギさんイサナミさんのフタハシラのミコやヒメミコ(皇子、皇女)を儲けられましたウミトノ(お産みのトノ)は5個所として、アマテルカミのアマノハラミ(富士山南麓)と、ワカヒメさんのツクハヤマ(筑波山神社か?)、流産のアハチ(伊弉諾神社、兵庫県淡路市多賀)と、ツキシミさんのツキシミ(九州、江田神社、宮崎市阿波岐原町字産母)、それとソサノヲのクマノ(産田神社、熊野市有馬町、および、熊野本宮大社、和歌山県田辺市本宮町本宮)でした。

4 ひのかみの みつみなの アヤ

① ミヤコ（首都）には、全国各地からクニカミ（後の国司）などが集まります。8代のアマカミ（古代の天皇陛下）であられた、アマテルカミのご尊声（お声）を聞くためでもあります。

アマテルカミが生活なさっているミヤコは、現在の三重県の志摩市にありました。10世紀に記された『延喜式』に記載のある、「粟嶋坐伊射波神社」が当時の面影を伝えているようです。今でも、伊勢神宮の摂社のうちのひとつになって、20年毎（ごと）の式年遷宮も立派に継続されています。この時のミヤコは「たかま」とも呼ばれます。

「たかま」は「たかまの はら」のことで、漢字以前の時代のヲシテ文献では、大宇宙の全体のことを指します。宮中に、大宇宙の哲学的な集約の「もとあけ」を祭祀したので、大宇宙の中心に繋がる場所として「たかま」と呼ばれるようになったのです。

御前会議も終わりなりますと、集った人々の中から、これを聞いておきたい、あれを聞いておきたい、と、いろいろな質問が出てまいります。

② この時は、オオモノヌシ（クシヒコ）が質問をしました。クシヒコは、アマテルカミの孫にも当たる人物です。とても、立派な人物でしたので、後（のち）に「ひの わわけみの」と尊ばれるほどです。壮年になっても、貪欲な程にも気になる疑問点の一つ一つ勉強し説明を続けていたのです。

この、クシヒコの質問は次のことでした。

「アマテルカミ（ひのかみ）の、実名（いみな・まことな）の謂（いわ）れに付きまして詳しくお教え下さいませんか？」

そこで、集まっていた人々の中で、それはね…と、

言葉を発してくれる人がいました。

富士山を北に仰ぐ所に本拠地を持つオオヤマスマミさんでした。

オオヤマスマミさんの先祖は、立派でした。

アマテルカミの、お后（きさき）さんの父上でもあった先代のオオヤマスマミと言う人物も居ました。この先代の、オオヤマスマミさんは、アマテルカミのご誕生の時に祝賀の歌をいち早く自作して朗唱した人物でもあったのです。当時を知る人の秘話をも混じっているかも知れず、極めて貴重な話になりました。

「私のミヲヤ（先祖）の記してくれていましたウタに、この事が詳しくあ

りました」

と、言います。

集まっていた、「モロカミ(中央の要職の大臣、地方地方のクニカミ、など)も、それは、是非ともお教え下さいと、身を乗り出します。

そこで、

当代のオオヤマスマミさんが、居を改めまして謹みて話を始めました。

③ 昔々のことでした、

国家の肇始(ちようし)の始まりの時に、初代のアマカミ(古代の天皇陛下)のクニトコタチさんは、八方に教え司(つかさ)のヤクタリコを使わずことになさいました。その地方の人々の役に立つツト(土産物)を持つてのことでした。ツトはキクサ(人々の生活向上に役立つ、良い品種の植物の種や苗木)です。現在の関東地方(古代での呼び名はホツマクニ)と、東北地方(古代での呼び名はヒタカミ)に使わされましたのが、8人のうちのおひとりの、「たのみこと」でした。「ひがしはるかに なみたかく たちのほるひの」事から、「たかみむすひ」と名乗る事ともなりました。また、「とこよくに(日本の縄文建国の時の国号)」建国のシンボルでもありました「かく(カグ・たちはな)」の樹を植えて、富士山のことを「かくやま」と称することにもなりました。さらに、長い年月の計算の要(かなめ)とする樹木の「まさかき」を植えることが出来まして、「とこよくに(日本の縄文建国の時の国号)」における重要な位置づけを、ヒタカミのクニが得る事になったのでした。

さて、そのタカミムスヒの5代目に当たります。実名(いみな・あみな・まこと)のタマキネさんは、とても革新的な変革を実行なさいました。タマキネさんを、尊んで「みむすひ」とも言います。

タマキネさんは、大宇宙の哲学的な凝縮の形態を「もとあけ」として整理し、そして、「もとあけ」を宮中に祭祀なさることに世の中の全てを納得させることに、なされたのでした。

つまり、

大宇宙と、国家の中心である宮中とのリンクを、敢然として完遂なさいましたのでした。ここによりまして、些細な諍い事は雨散霧消の経過を辿り、国家の根底の礎が強固に定まることになったのでした。

国家全体の利益のためには、自らのヒタカミのクニの事を少し外してまでの、その「ををやけ」に尽くすお気持ち世の中の人々に大きな感動を、インパクトとしてぶつけたのでした。

タマキネさんは、「ひかしのきみ」と、呼ばれます。

宮中の「たかま」に祭祀した「もとあけ」は、

- 1、アメミヲヤ（大宇宙の創造神）
- 2、モトモト（トホカミエヒタメ・方角の守り）
- 3、アナレ（アイフヘモヲスシ・言葉の守り）
- 4、ミソフカミ（物質全般）

の、哲学的な世界の把握の構造です。

タマキネさんは、その基礎の世界把握を根底として、世上の繁栄を祈念するための「おおなめこと」（のちの、大嘗祭）を創始なさいます。この結果、人々の生活が向上し・安定を見ることが出来ましたので、「トヨケカミ」とタマキネさんには尊敬名が付きました。

④ さて、一本を6万年に数えている「まさかき」の本数が、21本目の時代のことでした。1207520年の勘定になります頃です。（一本6万年でありますのが、短命の樹もあって、20年で枯れてしまう樹もありました、でも、これも公称は6万年の勘定に入れての年数です）

これ程の年月を経て来ても居るのに、

また、

世上は豊かに繁栄して人々の暮らし向きも向上しているのに、

また、国の中が整って、1500人も各地のリーダーが育っているのに…、

それが、

中心であるべき、朝廷に、居ないのは！ 次の時代の！

アメノミチを得て人々のさまざまな困難に回答を齎してくれる、中心の「カミ」（時代をリードしてゆく天皇陛下）が！

次代を担ってくれる「カミ」（時代をリードしてゆく天皇陛下）が、無くては、未来が危うい！

嘆きの、トヨケカミの行動は、富士山への登山に移りました。

富士山の頂上から見渡すのは、麓だけではありません。将来についての、物思いです。沢山の繁栄した人々が繁茂しても、「ミチ」無くしてはどうなるものか？

さらに、嘆きの思いを深められたトヨケカミは、自国のヒタカミに戻って業（湯）かれました。そこには、愛娘（まなむすめ）で、皇后陛下に上かられていたイサナミさんが、また深く悩みをおつしやります。

「よつぎこも がな」（立派な、お世継ぎ子、このことを、どうしても授かりたいのです！）との、切々たるお声。

トヨケカミは、模索なさいます。

うらなひて（齎されてくるめぐりを、より良くしようとするやり方）の結果は、「ツキ・カツラキのイトリヤマ」での、世継ぎ子の下されますようにとの

8000回の祈願でした。おそらく、「ツキ」は現在の月山のことで、黄金の花咲く東北の中心の西に当たります。「カツラキ」はその東の当時の東北地方の中心地の現在の日高見神社（『延喜式』記載の神社・）でありましょうか。ともかくも、「ヨツキヤシロ」をお建てになって、祈願の8000回に没頭なさいます。「カシキ（あか・しろ・き）」のシテ（樹の繊維を染めて三色に束ねたもの）を、奉（たてまつ）っての、祈願です。勿論、トヨケカミが親（みず）からに冷たい水に「ミソキ（後世の禊）」をなさいましての誠心誠意を込めたるものでした。

そのような、真心が通じたのでしょうか、8000回の祈願の後には、ついで、「アメノミヤヤ」の「まなこ（御眼玉・おんめだま）」から、「ひ（日）」と、「つき（月）」の分け下しが、起きたような映像が、トヨケカミには見えたのでした。そして、宇宙の中心の「アモトカミ」によって、子種の形の元に統合されて、そこに、「ミソフカミ（物質の全般）」が備わってくるわけです。

こうした、トヨケカミの祈願の真つ最中に、同時期に、当事者の、フタカミ、のイサナギ・イサナミさんは富士山近くにおいででした。特に、イサナギさんは、富士山の頂上にお登りになられての、祈願をなさいます。大きな、カガミ（金属鏡）を山頂にまで運ばれてのご祈願です。

『司（つかさ）、司（つかさ）のトミ（臣）を同行して、全国各地を巡（めぐ）り社会の悪癖を直し、「ことは（言葉）」の全国通用の普遍性を高め、新田開発の事業展開を進めて、また、稲作の耕作方法にウシ（牛）やムマ（馬）の畜力を導入して効率の向上を及ぼして来ました。

アマカミ（古代の天皇陛下）への正式即位の前には、女の子のヒメミコ（皇女）の誕生も得ることが出来ました。でも、女の子は、西の方角、秋の季節に譬えられています。これは、「か」の方位、左右では「みき（右）」に当たります。

未来を開いてくれるのは、やはり東の方角、春の季節です。これは、男の子です。どうしても、男のミコ（皇子）の誕生が待ち望まれるのです。「た」の方位、左右では「ひたり（左）」に当たります』

こうして、7代アマカミ（古代の天皇陛下）のイサナギさんは、富士山の山頂においての祈願をなさいました。

富士山の山頂には、コノシロイケという小さな池があります。現在では空池になっていますが、当時には水が湛（た）えられていたようです。富士山、当時の呼び名では、ハラミヤマのコノシロイケの池水で、

まず、「ひたり（左）」の目の注ぎ洗いをなさいました。「ひたり（左）」の目は、方位の名称から「たのめ（左の目）」と言います。「た」は、春の季節、暖かな雰囲気、つまり、太陽のエネルギーに満ち満ちた象徴です。それで、

お日様(太陽)にお祈りをなさいました。

次いで、「みき(右)」の目の注ぎ洗いをなさいました。「みき(右)」の目は、方位の名称から「かのめ(右の目)」と言います。「か」は、秋の季節、寒くなった雰囲気、つまり、月のエネルギーの及んでくる象徴です。そこで、お月様(月)にお祈りをなさいました。

直径が今の物差しで50cmもあるうかとされる大きな金属鏡を、作ってくれた人が居ました、イシコリトメと言います。

イサナギさんは、1000日の祈願を、この大鏡のマスカガミ(10万人の平均身長を円周の長さとした)の前で行うことになりました。日夜を分かたずと言うほどの、お力をお入れなさっておられます様子です。次代のアマカミとして、重責を担ってくれるミコ(皇子)のご誕生祈願でした。マテ(左右の事)のそれぞれに、お日様(太陽)と、お月様(月)を当てて「みたま」の分け下されることを希(こいねが)われます。これを、古語で「アクリ」といいました。ようやくに、「ひ(太陽)」の「みたま」が、イサナギさんの「ちりけ(お臍のあたり)」に、差し込んで来ているようにも感じられました。それでなのでしょうか、お心の強く、そして誠心誠意の祈願が1000日にも及んでの頃には、「しらは(白衣)」も、長く着続けていたため桜色に染まって来ました。

そんなある日のことでした、イサナギさんが、月の障り(月経)の事をイサナミさんに尋ねました。そうしますと、三日前に月の障り(月経)が終わりました。と、の事でした。身も清くて気持ちも良いので、「ひ(太陽)」待ちをしましょう。と、イサナミさんは言葉を続けます。イサナギさんも、それは良い事です。と、笑顔で答えます。

一心に心を合わせて、日の出を拝んでいますと、「ひのわ」が「フタカミ(イサナギさん・イサナミさん)」のすぐ目の前に飛び来たって、輝いているように見えました。二人とも、夢のような心地でした。

やがて、我に返ってみると、二人とも心の中がポカポカとして、ウキウキしていました。

山麓のおミヤ(宮殿)に戻りますと、オオヤマスキさんが、お酒(ささみき)を勧(すす)めてくれました。この、整った時期・タイミングの良さには、得(え)も言われぬ神妙さを感じます。

そこで、イサナギさんは、お酒のいわれを訊ねてみました。と、言いますのも、

お酒は昔からの楽しみなのです。

最も楽しい時の、その演出には欠かせないものです。また、お神酒(みき)の上がらぬ「神」は無いとも、近世に言われたような事もあります。至福を

楽しむと共に、また、将来の展望のために人々の心を合わせる効果もあります。

さて、イサナミさんは、お酒に付きまして、次のようにお答えになりました。

『昔の事でした、わたくしが「トツキ（結婚）」を致します時に、お酒の事は聞いた事がありました。良く解らなかつたので、何回も聞いたのでした。ハヤタマノヲさんにも聞きました。それで、結局は、最後に聞きましたのが、コトサカノヲさんからの説明でした。コトサカノヲさんからの説明は、このようでした』

と、イサナミさんは、言葉が続けます。

『「と」みき（寝所にてのお床入りの際に、お召し上がりになる、お酒）」は、先ず始めに女性が飲む事になっていきます。次いで、男性に勧めるわけです。その後（のち）のトコ（床）入りでは、女性はコトアゲ（願文を言う事）をしない事になっています。男性からの誘いを待ってから、女性は求めるようにして下さい。そして、したつゆ（精子）を得てお互いが本当に打ち解けるようになります。それは、大宇宙の中心のアモトから、ヒト（人）の形成の元となるタマが降（くだ）され宿り来る形になる、大切なミヤ（見えないもの）が、物質を結び合わせて、具体化させてゆく場所（と）ところ（現在では子宮）に、子種が宿るのです。

この、子種の宿り整えてゆくプロセスは、あたかも、国家の形成と、整えてゆく方途とよく似ていると思われれます。と、コトサカノヲさんからの、説明でした』

イサナギさんも、この、コトサカノヲさんの教えのまにまに、事をお進めになりました。

こうして、目出度くご懐妊の運びとなりました。

それが、十月十日とも現在でも言われますが、10ヶ月にもご懐妊の期間が過ぎましても、ご出産の様子が起きません。またさらに、もう一年経（た）っても、ご出産の気配もありませんでした。これは、何かの病気ではあるまいか？ ご心配のままに、長い間の年月が流れました。そして、ついに96ヶ月もの年月を経（へ）て、漸（ようや）くにお産まれになられたのは、ミコ（皇子）でした。後（のち）に、アマテルカミと尊称されるお方になられます。

時に、マサカキ（長い年月を数える樹木）の、植え継ぎ植え継ぎしての21本目の時代の事でした。

詳しくは、マサカキの暦の21本目、125枝、31年目（キシエ）の春の正月のお一日（ついたち）、つまり元旦の事でした。

初日の出が、ほのほのと、昇ってくると共にミコ（皇子）は、お産まれになられたのです。

お姿は、まあ（丸）くて、玉子のようにすべすべです。普通の赤ん坊とは何だか違うようで、得も言われぬ美しさが感じられます。

ウヲヤ・おきな（ご後見役）のオオヤマスミさんは、美しいミコ（皇子）のご誕生に思わず賛歌を作りました。

むへなるや ゆきのよろしも

みよつきも よよのさいわい

ひらけり

と、朗（ほが）らかに声高く歌い上げます。

その声は、三回（みたび）、富士山の麓に響き渡ります。

「ゆきよろし」とは？ どういう意味でしょうか？

祝賀に集まってきた人々から、質問が出ました。

それでは、「ゆきよろし」の言葉について、詳しく説明しましょう。

と、

オオヤマスミさんは、居を改めて、謹んで言葉続けました。

『トヨケカミさんのお教えの内に、この言葉についての解説がありました。

「アクリ（皇子のご誕生を希う）を祈願しての、8000度（たび）にも渡つてのミソキ（禊）の間にだんだんと解つてきた事だと、トヨケカミはおつしやっておられました。ミコ（皇子）ご誕生の安寧を祈っていましたら、そこに、災いの障りを及ぼしてくるかもしれないモノがある事に気付きました。それは、良くない思いなどです。つまり、妬（ねた）みであったり、怨（うら）みであったり、羨（うらや）みの心の攻撃的な思いであったりします。

これらは、「イソラ」とも言います。それらを、防いで、ミコ（皇子）のタマに物質形成が為される際に、健やかな育成が全うできるようにしてくださいるのが「エナ」です。

「エナ」は現代では朧衣とも書かれます。「エナ」の言葉は、大宇宙の中心のアモトから、タマが降されて来て「エ」、それが、和（なご）やかに包（くる）まれた音韻の意味の「ナ」を、原意としています。

「エナ」が、「タマ」を包み守ってくれる、この、成り立ち、全くの所、「オノコロ」の言葉のとおりです。

「オノコロ」の言葉の意味は、一言で謂（い）いますと、「より良きように整い纏（まと）まる」と申せましょうか？ 天地開闢の時の地球が、高温でドロドロしていた時に、アメミヲヤ（大宇宙の創造神）の巡りによって、冷却され固まって来ました。これは、第一回目の「オノコロ」です。第二回目の「オノコロ」は、初代のアマカミ（古代の天皇陛下）に即位なさいましたクニトコタチさんの、国家の創建樹立のことを指し示します。そして、第

三回目に「オノコロ」と称されるのは、第7代目のアマキミ（古代の天皇陛下）に即位なさいましたイサナギさん・イサナミさんの国家再建の事業の成功のことでした。

「イソラ」の災いを及ぼしてくるモノに、悪い影響を少しも寄せつける事無く、「エナ」は護ってくれたのでした。タマ（人の形成の源・大宇宙の中心から降されるもの）に、物質が集まり、これ程に美しい赤ん坊に成り得たのは、「より良きように整い纏（まと）まる」「オノコロ」です。

きつと、前世がとても御宜（およろ）しかったのでしよう。

「ゆき き」のミチ（道）と、という言葉があります。

「ゆき」とは、大宇宙の中心のアモトに、「タマ」が戻る事。

「き」とは、大宇宙の中心のアモトから、「タマ」この世に降され来る事。

春の正月のお一日（ついたち）の、つまり元旦に、

初日の出が、ほのほのと、昇ってくると共にお産まれにられたミコ（皇子）は、とても、お美しかったのでした。

お姿は、まあ（丸）くて、玉子のようにすべすべです。普通の赤ん坊とは何だか違うようで、得も言われぬ美しさが感じられます。

オオヤマシミさんは、

『きつと、前世がとても御宜しかったに違いありません』
と、お感じになったのでした。

大宇宙の中心から降され来たった「タマ」の、この世への初登場です。

ご歓迎の行事が行われます。お祝いの「イワ」、成りて来たり集合して纏（まと）まった「ト」を、いよいよ開きましょうと、「サク」でお祓いをします。

「サク」は、白木で造った平板で、バットの上半分のようなものです。古来から、飛驒の山奥の位山（くらいやま）の、イチイ（櫟）の華やかな白さの樹で作ったものが、最高とされてきました。

お祓いで左右に振る「サク」は、元旦の日の出の光の輝きに、一層輝きます。

シラヤマヒメさんは、早速、産湯を用意します。

シラヤマヒメさんは、イサナギさんの妹さんのようです。

また、アカヒコさんは、絹作りの名人でした。産着にと、かねてから用意の絹糸を、ナツメさんの織り手によって柔らかな絹布にして、献上してくれていました。中世にも、赤日子神社（『延喜式（西暦927年完成）』に記載されている神社・愛知県蒲郡市）からの絹糸の伊勢神宮への奉納の事は『令義解（りょうのぎげ・西暦833年成立）』に記載していました。

お母上のイサナミさんは、とても、お疲れでした。

長孕みの事もありましたので、母乳の出方も少なかったのです。

そこで、ホイヰのカミ（司）の、奥さんのミチツヒメさんが乳母として御仕

えする事になりました。しかし、ミコ（皇子）は、お目を閉じたままです。半年もの後の事でした、ようやく、初秋の7月の満月の日に、「シホ」の目を開かれたのでした。人々の手を打つての大歓声で、ミチツヒメさんの心配も、疲れも一度に消え去りました。

ミコ（皇子）の瑞祥（ずいしょう）は、富士山にも現われました。

富士山に、白雲が棚引きかかって、山頂のヤミネ（8峰）に霞が降り注ぎました。また、同時に、東北地方のヒタカミ（ヒスミ）にも、霞が降り注ぎました。この、「ミツ（瑞祥）」を、表わしておこうと、8枚の旗を絹布で作りました。「やとよはた」と呼ばれます。この「やとよはた」は、アマカミ（古代の天皇陛下）のご即位の際に、八隅（やすみ）に立てるのが恒例になります。

「サク」は、飛驒の山奥の位山（くらいやま）の、イチイ（欅）の樹で作ったものが一番です。

長命を得て、「サク」を持つことが出来るようになる人は、これこそが、クニトコタチさんの教えを身に付けた人だと申せましょう。

ご誕生の若ミコ（皇子）の、おばさまに当たるシラヤマヒメさんが、雪国の「コエネノクニ（ほぼ、現在の北陸道の諸国）」にて、暖かい産着を織（お）ってくれました。

そして、ミコ（皇子）に、お着せしようとしたところ、お声が聞こえませんでした。それは、

「うひるぎ」

と聞こえてきた、と、

これは、シラヤマヒメさんの、耳の辺（あた）りの事でした。

『あなうれし（なんと、嬉しい事でしょう）』

シラヤマヒメさんは、思わず、言葉を発しました。

その声を近くにいた人は、聞き漏らしませんでした。

『あのー？、ミコ（皇子）のお声は、何とおっしゃったのでしょうか？』

近くに、居合わせる人たちは、とにかく心配でたまりません。

藁（わら）をも、縫（すが）る、そんな気持ちです。何しろ、半年近くも瞳

を閉じたままのミコ（皇子）だったのですから、心配です。

シラヤマヒメさんはこう言いました。

『ミコ（皇子）は、ご自分でおっしゃいました。

「うひるぎ」と、おっしゃったのです』

え？

近習の人たちが、聞き耳を立てます。

シラヤマヒメさんが、詳しく言いました。

『わたくしが、聞きました事には、

「うひるぎ」の

「う」とは、大いなることを指します。

「ひ」とは、「ひ（太陽）」の「わ」です。

「る」とは、「ひ（太陽）」が降り来たったことです。

「ぎ」は、男のミコ（皇子）を言います。

それで、

「うひるぎ」さんと、ミコ（皇子）自らのおっしゃった、ご自分のお名前なので『

1000日のミソギ（禊ぎの祈願）をした、
父上のイサナギさんも、

長孕みで体力的にも苦しんだ、母上のイサナミさんも、

『それは、よく、聞き取って下さって有り難うございます』と、

シラヤマヒメの、耳の良さを褒め讃えました。そして、キクキリヒメと、褒め名を進呈することにしました。キクキリ姫とは、聞き切ったこと、そして、菊の花にも譬えたのでした。

シラヤマヒメさん、またの名は、キクキリヒメさんは、

褒められた事をとっても、お喜んでおいででした。その時に、思わずウタ（和歌）がほとばしり出たのでした。

あかたまの わかひるのるは

あおきたま くれひのみたま

ぬはたまなりき

そして、

冬至る日になりました、イサナギさま・イサナミさまは、

「ういなめゑ（大嘗祭）」を、厳肅に執り行う事に、あいなられます。アマカミ（古代の天皇陛下）にご即位なされての、「アメツチ（宇宙全体）」に、国民の幸せをお祈りして下さる正式なお祭りです。「ういなめゑ」は、二つの神殿を黒木（樹皮を剥がない丸太）なりに建てます。ひとつを「ゆきのみや」と言います。もうひとつは「すきとの」と、言います。

「ゆきのみや」は、コホシ（天地の中心）を祭るものです。

「すきとの」は、人の命を護るものです。

「ゆきのみや」は、アメトコタチをまつり、「あゆき」と言います。

「すきとの」は、ウマシアシガイヒコヂを祭り、「わすき」とも言います。

フタカミの、イサナギさんと、イサナミさんは、「ういなめゑ（大嘗祭）」の節目の祭祀も終えられて、天下はれて立派なアマカミとして、

富士山の南麓のおミヤ（宮殿）で、まつりごと（政治）を、親しくご執政（お執り）になられつつ、ミコ（皇子）を温かくご養育なされておられました。

富士山南麓の、宮殿はハラミノミヤと言います。または、尊んでアマノハラミとも、アマノハラとも呼ばれます。

16年の歳月は、あつ、という間に過ぎてゆきました。

むかし、昔、ミコ（皇子・アマテルカミ）の、ご誕生祈願を一心に強くして下さったお方がありました。それは、イサナミさんの、お父上のトヨケカミでした。8000回ものミソギ（精進潔斎の禊ぎ）は、大変なことです。8000回にも及びますと、冬の寒い時期での、寒（かん）のミソギ（禊ぎ）も、当然に含まれるわけです。熱い思いが余程の温度でトヨケカミの心を高ぶらせていた事かと、想像されます。その「かつらき」山の、8000回のミソギ（禊ぎ）を終えられましたトヨケカミのお顔から、ミコ（皇子）のご誕生を聞いて、大きな安堵の息が思わず出たものでした。

その後の、事を考えなくてはなりません。

トヨケカミは、さらに、多忙な毎日を送る事となります。「いとり（優雅で大きな鳥）」を屋根に付けた御輿（みこし・テクルマ）を作らせます。アマテルカミを、勉強のために、お迎えするためです。昔、ミコ（皇子）のご誕生祈願をした、「かつらき（カツラ）」山の麓に、勉強所の「あまつみや」を建てて、アマテルカミのご教育に備えるためでした。この場所は、現在の宮城県遠田郡涌谷町の黄金山神社（こがねやまじんじや・『延喜式（西暦927年完成）』に記載あり）に考えて良いかも知れません。背後のお山は、篁岳山（のだけさん）と言って、産金遺跡を随所に秘めた貴重なお山です。

アマテルカミをお迎えに、トヨケカミご自身が出向いて行かれました。東北地方の新建築の出来ました「あまつみや」から、富士山の南麓の「はらみのみや」までの旅でした。富士山を仰ぐ「はらみのみや」では、7代アマカミ（古代の天皇陛下）のイサナギさん・イサナミさんがお待ちでした。16歳になったアマテルカミの勉強の留学の支度を整えつつの、御輿を待つ日々でした。

さて、到着した御輿には、トヨケカミがお乗りになつておられ、直々のお迎えに、イサナギさん・イサナミさんも夢見心地のような感動を覚えたのでした。

トヨケカミは、アマテルカミの勉強の工程について、イサナギさん・イサナミさんに詳しく説明をします。「あまつみや」のこと。黄金が産出する土地である事。勉強のカリキュラムの事。などなど…。

屋根に「いとり（優雅な大きな鳥）」を付けた御輿に、青年アマテルカミはお乗りになられます。また、八房（やふさ）の飾りを付けた御輿には、イサナギさん・イサナミさんがお乗りになられます。そして、もう一台の御輿にはトヨケカミがお乗りになられます。また、アマテルカミの乳母をお勤めにな

られた、ミチツヒメ（おちつ）は、「ケタコシ（質素な輿）」に乗ってお供です。こうして、ヒタカミへの大移動となりました。

ヒタカミは、古名で「はこくに」とも言いました。それで、中心地は「けたつほ」です。「はこ」は四角い事、「けた」も同様の内容を意味します。「つほ」は要（かなめ）のことです。「けたつほのやまてみや」は、トヨケカミの当時のミヤコのひとつであったと考えられます。現在の宮城県石巻市桃生町の日高見神社の所を、候補地の筆頭に挙げて置きたいと思えます。日高見神社は『延喜式（西暦927年完成）』に記載されています。付近には、産金遺跡が点在しています。

ヒタカミに到着した一行は、黄金のまばゆい光を目（ま）の当たりになさったことでしょう。それは、ミコ（皇子）の到来を強く歓迎しての事でもありません。

『ひのわかみや さん、だから、「ワカヒト」さんと、イミナ（実名・まことな）を申し上げてはいかがでしょうか？』

トヨケカミは、提案しました。

フタカミの7代アマカミ（古代の天皇陛下）、イサナギさん・イサナミさんは、とっても高貴なお名前であると恐縮しつつ了承なさいました。

イサナギさん・イサナミさんは、トヨケカミに、勉強の事を安心なさって託（たく）されました。それで、新築の「あめのみや」にアマテルカミお暮らしになられます。

イサナギさん・イサナミさんは、ヒタカミを後（あと）になさいます。そして、今度は琵琶湖の西南岸の「おきつ」のミヤ（宮殿）に、お戻りになりました。

アマテルカミは、青年君主候補の皇太子として、「あめのみち」を勉強なさいます。ご学友は一人おられました。トヨケカミの孫のフリマロさんです。フリマロさんは、後（のち）に、7代目のタカミムスヒに就（つ）かれます。

トヨケカミは、山をひとつ越した「やまてみや」に居られます。アマテルカミの「あまつみや」へは直線距離で20kmほどです。トヨケカミは、日ごと「あまつみや」に上ってこられて指導をなさいます。

それは、アマテルカミの、ミチ（道）を求めるお心が強かったからでもありません。そんな、ある日の事、アマテルカミのなさった質問は、次のようなものでした。

『まことな（いみな・実名）は、尊んで言う場合はキミナとも言います。

その、オト（音）の数には、男女で違いが付けられているのは、何故でしょうか？ 一般に、男は4音で、女は3音ですね。姉のヒルコひめは、「ヒルコ」で3音。わたくしは、「ワカヒト」で4音です。』

タマキネ（トヨケカミ）は、答えます。

『オミナ (まことな・実名) には、構成の要素として、1・父母のこと、2・世継ぎであるかどうか、3・名前の事、4・名乗りの事の、合わせて4つあります。そのうちの名乗りには、位の上下によって幾つかあります。例えば、アマカミ (古代の天皇陛下) は、国民のすべての人々の1から10までを面倒見るわけですから、「ひ (1)、と (10)」で、「ひと」の名乗り名を付けます。その他、名乗り名には、「きね」「ひこ」「うし」もあります。これは、男性の事です。一方、女性のほうは名乗り名を付けないのです。それは、将来お嫁に行くからなのです。はじめの2音は、父母からの繋がりを表します。そして、女の子は次代を作る子供を産んでくれることから、「こ」を、付けるのが一般に多いです。「なにこ」ひめ、または「こなに」ひめ、「なにお」「おなに」とも名付けます。それで、女の子には3音のオミナ (まことな・実名) になるのです。男の子は、名乗り名が付くので4音になります。その他に、讃え名の呼び名もあります。この、讃え名には特にオト (音韻) の数に制限はありません。

オミナとは、その人の人体の形成の源にまで遡る意味合いがあります。大宇宙の中心のアモトから降り来たった「タマ」の、物質を集合させての人体形成です。その生命の維持の関与にまで関わる、それが、オミナなのです。それで、オミナの事を「まことな」とも言うわけです。「ま」の「こ」で、「と」になる意味です。「ま」とは、アモトからの降されモノ。「こ」とは、降り来たって固まる意味。「と」とは、降されモノが集中されてひとつになってくるイメージです』

5 ワカのマクラはことのはのアヤ

中央の朝廷に仕える司(つかさ)、司、地方の政治を担当する「クニカミ(後の国司に近い)」「達が沢山集まって、会議を行った後のことでした。オオモノヌシ(2代目クシヒコ)は、多くの高邁(こうまい)な英知の高い人々の集う事は珍しいので、この機会に疑問点を解明しておきたいと願いました。

クシヒコさんの疑問は、次ぎの内容でした。ワカ(和歌)の、頭に付ける「ことは(言葉)」には、一般的に決まりきった言い方がありません。つまり、ワカ(和歌)の、頭に付ける「ことは(言葉)」のことを、「まくらことは」とも言います、後の時代の表現では、枕詞、とか、冠詞、とも言います。

でも、ヲシテ時代では、「真っ暗」の意味合いから「まくら」と、言っていたのです、ね。勿論現代人にはおそらく初耳の事であるはずです。クシヒコさんも、知らなかった事でも、ね。その、謂れについて、オオモノヌシの2代目を継いでいたクシヒコさんは、強く知りたいと願っていたのでした。問いかけて、したものの、なかなか誰も答えを述べてくれる気配がありません。難しい問いだったでしょう。そのうち、アマテルカミの重臣になっていたアチヒコさんが、漸(ようや)くに口を開きました。

『それは、昔に記された「みそきのふみ」に出ています。』
クシヒコさんに、声を合わせて、居並ぶほかの中央の朝廷に仕える司(つかさ)、司、地方の政治を担当する「クニカミ(後の国司に近い)」「達が、

『それは是非とも、お教え下さい』と、
口々に、声を上げていました。
さて、

居ず舞いを改めた、オモヒカネ(アチヒコ)さんは、

「みそきのふみ」に基づいて「まくらことは」が、どうして「真っ暗」の意味からきているのか？ 解説を、始めました。

『昔、フタカミのイサナギさんと・イサナミさんは、7代目のアマカミ(古代の天皇陛下)のみ位(くらい)をお受けになられました。そして、ご即位の儀式の挙行されましたのが、「オキツホ」の宮殿でした。「オキツホ」は、現代の滋賀県大津市の日吉大社の所として最有望の候補地)ご即位の時から、早速にお始めになられたのが、国民の言葉を整えてゆく事業でした。

そもそも、「やまとことは」には、高度な哲学が根底の定礎において嵌(は)め込まれています。すなわち、「あ・い・う・え・お」の5母音は、世界を形作っている5要素から発生しています。5要素(態)とは「うつほ・かせ・

ほ・みつ・はに」です。「うつほ」は気体。「かせ」は熱くないエネルギー。「ほ」は、熱いエネルギー。「みつ」は、液体。「はに」は、固体です。また、それぞれの母音のヲシテの文字形状は、発音・発声する時の人の口の形にも、同じく対応しています。また、子音の10要素(相)は、文章の構文を構成する力をも表わし、それぞれの言葉の意味を形成してゆく根底の要素にもなっています。それらの事からしますと、「やまと ことは」とヲシテ文字の形状は、言葉を整えてゆく力を秘めていた訳です。

フタカミの、イサナギさんイサナミさんは、もともと在(あ)った48音図を、唱和しややすいように組み替えた「あわうた」の48音のウタの広範な流布を図る事になりました。人々を集めては、「あわうた」の合唱会です。するとどうでしょうか？ 言葉の行き違いでのトラブルは、びっくりするほどに、劇的な減少が起きました。

「あわうた」は、5音・7音で4行の、合計48音です。5には、根っこの意味が込められています。7には、満ちてくる意味合いが込められています。

「あわうた」の5音・7音の始めの2行の24音は、男性のイサナギさんが唱和を先導なさいました。「あの あわうた」とも言います。

「あわうた」の5音・7音の後(あと)の2行の24音は、女性のイサナミさんが唱和を先導なさいました。「わの あわうた」とも言います。

事ある毎に集まる人々に、切々と広めて行かれましたらば、「ナカクニ(現代の近畿地方にほぼ近い地域・特に琵琶湖地方を中心として)」の隅々にまでも、言葉の解り難くて困る事は無くなって来ました。あ、「あわうた」で、

整って来たクニだ、と、此処に暮らす人々は感謝をする事になりました。誰ということなく、此処は、このクニは「あわクニ」だな！と、言うか呼ぶかに、名前が付いて来たのでした。

さて、「ナカクニ」すなわち、呼び名が新しく付いて来ての「あわクニ」は、ほぼ、落ち着いて来たわけでした。でも、遠国にはまだまだ、再建のための手助けを求める声が高く上がって来ています。

そこで、次に、7代アマカミのイサナギさんと、イサナミさんは、今の九州に赴(おもむ)かれる事になさいます。

(九州での最初の再建の土地は、現在の宮崎県のシーガイアで有名になった場所でした。江田神社という、『延喜式』に記載のある神社があります。此処には、禊ぎ池と言う伝承も残っています)

此処では、「たちはな」を、お植えにされました。「たちはな」は、「かく(かく)」とも言います、遙かむかし、初代のアマカミ(古代の天皇陛下)のクニトコタチさんの時代(縄文時代前期ごろ)の建国の記念碑的な樹木です。それは、建国の当時の国の名称の「トコヨクニ」のイメージが沸々と沸(わ)

いて来る樹木です。

7代アマキミのイサナギさんと、イサナミさんは、建国時代の状況にひとたび立ち返ってみてはどうか？ との、問い掛けをなさる事を優先事項に持ってこられたわけです。何でも、かんでも、「これを、こうしてくれ」「あれを、こうしてくれ」と言った、要求ばかりでは対応が仕切れるものではありません。そもそも、建国の当時の状況は、

「ここは、このようにすると、もっとうまく行きますよ」

と言った、アドバイスの仕事が主流でした。

それが、豊かになって来るにつれて、自主努力が前提であるはずの認識が段々と薄くなって来ていた訳です。その精神の再認識のことは、「たちはな」の植樹によって、歴史の根底の在り様を人々に解って貰えたのでした。

人々の心根を整える事に繋がりましたので、「をとたちはな の あわきみや」と名付けられました。現在での場所は、宮崎県宮崎市阿波伎原の江田神社でありましょう。「を」との意味は、「たま の を(精神)」を整(と)のえる、ことから、「たまのを」の「を(繋ぐ働きのもの)」と、整えるの「と」からの由来です。

こここのミヤ(宮殿)の「を」とたちはな の あわきみや」にて、ミコ(皇子)がお産まれにられました。お名前を、モチキネさんとご命名になります。ます。

九州での社会の再生も凡(おおよそ)に済ませられた、フタカミ(イサナギさん・イサナミさん)は、次に、現在の四国に向かわれます。ここでは、イサナギさんの叔父さんのサクナギさんのお子さんであった、イヨツヒコに「あわうた」を広めさせる事になりました。代理の教導です。そのやり方が上手(うま)かったものでしたので、人々の言葉によるコミニケーションはとても良好になって来ました。そこで、イヨツヒコは、褒め名を頂戴できませんでしょうか？ と、フタカミ(イサナギさん・イサナミさん)に求めます。そこで、「アワツヒコ」と、褒め名を授与する事になります。「あわうた」に、基づいた命名です。この、イヨツヒコの、「アワツヒコ」の褒め名の授与は、二名(ふたな)を求めると、言われる由縁でした。イヨツヒコさんの、現在のその伝承は、愛媛県の松山市に伊予津彦神社として残されています。『延喜式』に記載のある神社ですから、優に1000年以上の歴史は確認できます。

四国での、社会の再構築も目処(めど)が付きました事から、フタカミ(イサナギさん・イサナミさん)は、次の地方に向かわれます。四国を後(あと)になさいましたフタカミ(イサナギさん・イサナミさん)の、次ぎのご活躍の地方は、現在の紀伊半島でした。当時の呼び名は「ソサ」クニと、言います。

ここでは、ナカクニに近かったからでしょうか、「あわうた」の流布はだいぶ進んでいました。比較的静かなご生活の、フタカミ（イサナギさん・イサナミさん）でした。「き」のクニの、古い別名で「きしい（年）クニ」の名称がありました。フタカミの為（な）さいます事の殆（ほと）んどない、「しつか（静か）」に「年（居ます）」の、意味だ。と、話題になったのでした。そこで、フタカミ（イサナギさん・イサナミさん）は、建国の最初の精神に人々を回帰してもらうことに重きを置かれるのでした。質素、自立の精神です。建国時代の象徴の樹木の「たちはな」を、おミヤ（宮殿）に、お植えになられました。この場所は、現在の和歌山県和歌山市の国懸神社（くにかかす）の所であつたでしょう。初代のアマカミ（古代の天皇陛下）の、建国の樹立された時の国家の名称は「とこよ」クニと、呼んでいました。国家の建国の理念である「ト」のロシテの精神に基盤を置く国家の構造であるので、「と」の「こ（まとまり）」による、「よ（社会の成り立ち・良い事）」のクニ（国家）と言つた意味です。その、初代のアマカミ（古代の天皇陛下）クニトコタチさんの建国の精神から、フタカミ（イサナギさん・イサナミさん）の「きしい（年）」のクニは、「とこよさと」とも、呼ばれる事になりました。

さて、フタカミ（イサナギさん・イサナミさん）の、最初に儲けられたミコ（皇子・皇女）さんは、女のお子様でした。ヒルコヒメさんと、申し上げます。ヒルコヒメさんのお生まれの時の、父母であるフタカミ（イサナギさん・イサナミさん）のご年齢が、丁度「あめのふし（現代で言う厄年）」に遭遇なさっていました。それは、父母の病の元になりやすい、と、言い伝えのありました事から、一旦捨て子にして、他の人に育ててもらっていたのでした。この、ヒルコヒメさんのご成長は麗しく立派な姫君（ひめきみ）に、おなりになりましたので、父母のフタカミ（イサナギさん・イサナミさん）の元に戻ってこられました。カクの樹を植えて、トコヨサトと呼ぶことになりました。ここ、ソサ（現代の紀伊半島）のキシイ（和歌山市）で、ワカヒメさんは、「あわうた」の教えを父母のフタカミ（イサナギさん・イサナミさん）と共に、人々になさいます。さぞかし、美しいお声のハーモニーでありました事でしょう。

「あわうた」を人々に教え広めつつのうちにミコ（皇子）が生まれました。カクの花（日本の固有種のカク）の芳しい花の許で生まれたのでハナキネと名付けられました。（後のソサノヲ・スサノヲ）現在の暦での5月の中頃、ロシテ時代の太陰太陽暦の旧暦での4月に入ってから、タチハナの良い香りの漂う中で生まれたのが、ハナキネさんでした。日本固有種のカクの花は、タチハナで、実がカクのミです。そんな良い香りの許での生まれのハナキネ

さんの人なりは、案外なことに粗暴なことでした。気に入らないことがあれば、イサチ・オタケヒ（泣きわめいて、叫びまくる）の、我がまま放題の子供だったのです。ハハ（母）のイサナミさんのケカレ（気の枯れた、穢れた）の在った際に孕んだ子だと、思われていたため、余計に我がまま放題が放置されてしまったのかも知れません。イサナミさんは、ケカレ（気の枯れた、穢れた）の時に孕んだ子だから、原因は自分の身から出た錆だとクマノ・ミヤを建てます。男の子はハハ（母）のクマ（心の病）に当たりやすい、と、古来から言われていました。イサナミさんは、タミ（一般国民）のヲエ（体の病）・クマ（心の病）も、自分の身に受けて守ってあげようとクマノミヤを建てました。

さて、そう言われると、クマノミヤが立派になるほど、ソサノヲには益々居場所が無くなります。ある日、ソサノヲがクマノミヤの近くで樹を燃やしていたずらをしていて、火が大きくなり過ぎたのを、イサナミさんが消火に当たるとちに事故死してしまわれました。

また、常々、イサナミさんは自然神を祭ることをして居られました。ウツホ（空気）のカミのウツロキ、カセ（風）のシナトヘ、ホ（火）のカミのカクツチ、ミツ（水）のミツハノメ、ツチ（土）のハニヤスヒメでした。山火事になって消火に当たる際には、ホ（火）のカクツチをお祭りなさいました。ツチ（土）のハニヤスヒと、ミツ（水）のミツハノメとが結びれてワカムスヒが生じます。ワカムスヒは、首には養蚕のクワ（桑）が生じて、ホソ（臍）

には**母虫**（ソ（水田の作物）・ロ（畑の作物））が生じます。火事の後の肥沃になった土壌が豊かにクワや稲などの作物の豊かさを齎す働きをワカムスヒと表現されたのでしょう。ウケミタマとして、豊穣の働きのカミとして祭ります。後にはオオトシカミ（ヲヲトシ）として祭られます。

イサナミさんのお亡くなりのおあと、ご葬儀はアリマ（花の窟神社、三重県熊野市有馬町上地）にておこなわれます。イサナギさんの姉か妹かのココリヒメさんが、ご葬儀を取り仕切りになりました。イサナギさんは、遠地に出かけられていたからでした。ハナの季節、ホの季節に、亡きイサナミさんを偲ぶお祭りをしようと、ココリヒメは定められました。ハナの季節にハナキネをお産みになられて、農作物の豊穣を祈願なさいましてワカムスヒをお祭りになられたイサナミさんを偲ぶお祭りであるからです。

イサナミさんのご遺体を納めたのは、洞窟で、祭儀は風葬のようでした。クマノの海を見下ろすアリマのヤマ（山）は、とっても清々しいところです。風葬ですと、砂漠でもない日本の風土の場合には、ご遺体の痛みが起きます。遠地から急ぎ戻ってきたイサナギさんは、是非とも、ひと目でもイサナミさ

んに会いたい。強い思いのことは、現代にもよく解ることです。ココリヒメは、傷んだ遺体は亡骸だから、と、止めます。でも、イサナギさんはそうは言われても、「そうか」とは思えません。やっぱり、ひと目でも会いたいのものなのです。

ココリヒメの静止を振り切って洞窟に入ってしまったイサナギさんは、悔やむことになりました。イサナギさんは、「悲しむから、急いで帰って来たのだ」と、ユツのツケクシ オトリハ【詳細は未詳】をタヒ（手に持つ火）として洞窟に入りました。すると、ウヂ（イモムシ・蛆虫）の集る状態たかでした。「こんなはずではあるまいし」と、イナヤ、シコメキ、キタナキと、アシ（足を引き帰りました）。

その夜の夢にイサナギさんはうな魔されます。夢の中で、イサナギさんは後悔して、また洞窟に行きますとイサナミさんが恨んで言います。「カナマコト（こつちに来ないでと、願いが叶うまでの事）、願いを聞いてくれなかった事で、私にハチ（恥）をかかせたのですね。我が恨みです」と。そして、シコメ（醜い女性）8人に追わせました。イサナギさんは、追われて逃げます。ツルギを振って寄せ付けないようにしますが追いつかれそうになります。そこでエヒ（酔う蔓の実、ブドウ）を投げましたら、シコメはエヒ・カツラを取り食べました。そのスキに逃げます。でも追いつかれそうになり、今度はタケクシ（竹の櫛か？）を投げましたら、これも、噛みます。また、シコメ達は追いかけるのです。そこで、モモの樹に隠れてモモのミ（日本固有種のモモの実）を投げます。シコメ達は、モモのミに退いて行くのでした。エヒ（酔うカツラ・蔓の実）は、緩めてくれるだけです。クシ（櫛）はタケではなくてツケ（柘植の木）で作るのが良いようです。（タケだと、楊枝に使ってしまったか？）モモのミを魔除けの優れたものとして、オフカンツミと呼ぶことになりました。実の核が硬くて腐りにくいので良いようです。（ホ21-13、ハニシキテマツルヤツクリ シコメナシ）

イサナミさんと、ヨモツヒラサカ【生死を分ける所か？ 詳細は未詳】にて、コトタチ（絶縁の宣言）をします。イサナミさんは、言います。

『ウルワシキ事です。此れにて、お別れです。その様になさいますなら、1000人のカウへ（頭）に付きまして、毎日クヒラン（首をする、殺すことか？）』

この世から人が居なくなってしまうのは困ります、イサナギさんは、対抗策で応じます。

『ウルワシヤ、と思います。』

その様になさいますなら、1500人を毎日生まれるようにします。それで、この世に人が居なくなる事は防げるでしょう。アヤマチ(過ち)を無く防ぐヨモツのヒラサカ【詳細は未詳】は、イキ(息)の絶えるマの境の限りのイワ(結界)です。これこそが、チカエシのカミ【詳細は未詳】だ』
夢が覚めても、悔やみの念にさいなまれるイサナギさんでした。

クマノのモトツミヤ(熊野本宮大社、和歌山県田辺市本宮町本宮)に帰ったイサナギさんは、オトナシカワ(社殿の西側を流れる清流)でミソキ(禊ぎ)をなさいます。沢山のヤソ(80)ものマカツヒのカミ(明るく照らしを生じさせるヒの働き)を生みて、マガリ(生じ来る時の濁り)を直そうとなさいました。カンナオヒと、オオナオヒを生み祭ってミ(身体)をイサキヨク(こころ爽やかにスキつと)なさいました。

後に、ツクシ(九州)のアワキ(江田神社、宮崎市阿波岐原町産母)でのミソキ(禊ぎ)に赴かれるに当たって、所々にマカツヒのカミ(明るく照らしを生じさせるヒの働き)を生みて祭られます。ナカカワ(福岡市の那珂川)には、ソコツツヲ、ナカツツヲ、ウワツツヲ【ツツヲのこと、詳細は未詳】をお生みになりました。カナサキに祭らしめました。現在の住吉神社(福岡市博多区住吉)に所縁をとどめています。

アツカワ(現、釣川か? 宗像大社、福岡県宗像市田島)にては、ワタツミのソコ・ナカ・カミのカミ(みつつの来たりて生じさせる働き)【詳細は未詳】を生み、ムナカタ(カナサキの支族)に祭らしめます。

シガウミ(志賀海神社、福岡県福岡市東区志賀島)にては、シマツヒコ、オキツヒコ、シガノカミ(カナサキの祖先の偉人たち)を、アツミ(カナサキの支族)に祭らしめました。

先代の6代目オモタルさんは、アワミヤのイサナギさんに「ミチヒキのウタ」のミコトノリをなさって教えられました。(導きのウタ)

『天下を治めるべきアワギミのイサナギさんよ、お聞きになつて下さい。

妻との別れが惜しまれる事は良く解ります。思いが断ちがたく葬送の送りに、アマカミたるヲヤヤケの立場の立派な人は、追って行くのはハチ(恥)です。追ってこられて困るツマ(妻)にとつては、シコメに追い払わねばならない事になります。

ヨシ・アシのこと、良いこと・悪い事もそうですが、水田開発で昔、アシ(芦)を引き抜いて新田を多く造成したこともありましたね。ヨシもアシも裏腹です。良かれと思っても、ツマ(妻)の気持ちにはアシキ事に取られてしまうこともあります。重い足を引き帰る日の、夜には夢にヨモツサカのコトタチサクル(宣言しての絶縁)です。ここに、ヲヤヤケを担う指導

者としての大きなウツワ（器量）が備わったのです。各地にミソギをして行ってタミ（国民）のココロ（精神）も整いゆきました。イヤマト（心に「トのヲシエ」がヤマのように）の如くに良く通る事につながります。重い足を引きずって帰ったこと、1500の新田開発に多くのアシ（芦）を引き抜いていったこと、それで、ミツホ（稲穂・租税）も多く成って国家安定に寄与したのでした。

此れこそ真実の「トのヲシエ」の通る姿です。マトのヲシエと、言えます。カカン・ノン・テンの三段階で言えば、初めの「カカン」では、マトのヲシエです。「ノン」は、アワクニ（湖国・6代アマカミから譲られた直轄の本貫地）の再建が成ったことです。三番目の「テン」は、ヤマトで全国の再建の成就です。

初めのアシハラを引き抜いて新田開発に当たったこと、アカルキ（明るき）のアシハラのウタにも覚って下さい。「アシヒキ」のようにマクラコトハ（枕詞）を初めに冠するのはウタのタネになります。マクラコトハの事、「アシヒキ」をタネとして「ヤマ」に掛かります。他での例で言えば、「ホノホノ」は「アケ」に掛かります。「ヌハタマ」は、「ヨル」のタネになります。「シマツトリ」は「ウ（鶉）」、「オキツトリ」は「カモ」にも「フネ」にもタネとなります。

このアチ（アメからのなりきたり集まる）の原理を、「ヌハタマ」の「ヨ（夜、世の中）」のウタマクラ（枕詞）として考えて下さい。覚めてアカルキ（アから来て広がり来る）マエコトハ（前に置く言葉）がマクラコトハなのです。真つ暗から、広がり来る明るさです。マクラコトハは、現代的には「真つ暗言葉」といったほうが解り良いかも知れません。

ココロ（精神）をアカス（アから来たって為し広がる）のは、「ウタ」のミチ（生じて集まる）です。ミソギ（禊ぎ）のミチはミ（身体）をアカス（アから来たって為し広がる）のです。共に備わってこそヤマトのミチと申せます。まさに尊いことです』